

# 昭和東南海地震における地域の液状化の記録 「戦争に隠された震度7」より

木村怜央著

吉川弘文館 P12-13

注.. 山方工場 II 現在の職員駐車場付近

京都第三中学校三年生であつた金山政喜は、七月に京都を出て中島飛行機山方工場で働いている時に地震に襲われた。その時の様子を、当時の日記に基づいて次のように振り返っている。

いつものように出勤して、昼食も終わり仕事にかかった時、自分は昨日書いた手紙を出そうと思つて工場の建物を出て、工場内にある郵便局へ向かった。五〇メートルも行かないうちに揺れてきた。午後一時三六分頃である。自分の前にいた牛は、よろよろとして歩けなかつた。自分も立っていることができず、電柱のない所で横になつて、いま出てきた工場を見ていた。地面は割れて生き物の如く動いている。精神が朦朧として、何を考えているのか自分にもわからなかつた。

工場の壁は落ち、窓ガラスは割れた。皆は中から飛びだしてきた。その時、小沢先生の叫び声が聞こえた。我々の友達がレンガの下敷きになつている。レンガの建物は見事に倒壊していた。大きなレンガの塊で、取り除くにも大変だつた。自分達も行ったが、どうすることもできずに茫然と眺めていた。血に染まった人達が担架に、また木板に乗せられて運ばれていった。手足の骨が折れてだらりとしている者、何か言おうと口だけを動かしている者、悲惨な光景であつた。救出も夕方までで中止された。暗くて何もできないからだ。レンガの下でまだ生きている人がいるのかと思うと何ともいえない気持ちになつた。(一部表現を改変)(半田